

Wouter J. Hanegraaff,
*Esotericism and the Academy: Rejected
Knowledge in Western Culture*

Cambridge University Press, 2012, pp. x + 478, \$114.00

長迫 智子

本書は、西洋エソテリシズム研究の大家である W. J. Hanegraaff による、歴史記述的な観点から西洋エソテリシズムを論じた著作である。Hanegraaff は、アムステルダム大学において宗教学カリキュラムの一環として、神秘主義と西洋エソテリシズムに関する研究を講じており、当該分野で多くの著作を発表するだけでなく、The International Association for the History of Religions (IAHR) における西洋エソテリシズムに関する初のセッションの企画 (1995)、*Aries: Journal for the Study of Western Esotericism* (2001-, Brill publ.) の刊行 (2010 年まで編集長を務める) や *Aries Book Series: Texts and Studies in Western Esotericism* (2006 -, Brill publ.) の刊行 (同じく 2010 年まで編集長を務める)、*Dictionary of Gnosis and Western Esotericism* の編纂 (2005)、European Society for the Study of Western Esotericism (ESSWE) の設立 (2005) といった活動により、西洋エソテリシズム研究という分野の確立に大いに寄与した研究者である。

そもそも、エソテリシズムとは一体何なのか。一般的には、秘教的な神秘思想とみなされるが、現状ではそれを明確に定義し説明できる言葉を我々は持たない、と冒頭からして著者は述べている。ヘルメティシズムやオカルト、魔術、神秘主義、迷信、非合理的なもの……こうした種々の語とエソテリシズムは関連づけて語られるが、しかしそこでは何か共通の存在が示唆されている。その「何か」とは何なのか。著者はイタリアのルネサンスから現代までのエソテリシズムに係わる歴史を叙述していくことで、その「何か」を明らかにしようとする。そしてまた、エソテリシズムという語による現象群の成立・発展に続き、それがどう研究されてきたか、というアカデミアとの関わりについても、上記のようなエソテリシズムの特質、捉えどころのなさによる難点を踏まえた上で述べられていく。

イントロダクションのタイトルである、*Hic sunt dracones* (= Here be dragons) というフレーズは、中世ヨーロッパに作成された地図において、未開の地を表示するものとして用いられていた。その比喻のとおり、エソテリシズム研究は長年未開の領域であったが、著者以外にも

Antoine Faivre や Kocku von Stuckrad, Nicholas Goodrick-Clarke らによる研究によって、アカデミックな一分野としてこの 20 年間に大きな前進を遂げた。しかし、依然として、エソテリズムについて共有しうる確たる定義は成立しておらず、個々の研究者によりその視点は大きく異なっているという状況にある。そうした中で本書は、既存の議論を検討しつつ、エソテリズムの歴史とされるものがどう構築されてきたのかという視点から、著者による新たなエソテリズム論が提出されることで、意義深い一冊であるといえよう。

さて、本書の構成は以下の通りである。各章の内容を概観した上で、本書の意義を改めて考察したい。

Introduction: Hic sunt dracones

1. The history of truth: recovering ancient wisdom
2. The history of error: exorcizing paganism
3. The error of history: imagining the occult
4. The truth of history: entering the academy

Conclusion: Restoring memory

現在の研究では、エソテリズムの始まりはイタリアのルネサンスであると多くの研究者によって認められている。著者も同様の認識であり、第 1 章ではそこにおける古代の叡智(ancient wisdom)の復興に焦点があてられる。著者によれば、ルネサンスの特質とは、人間の思想の歴史と、人間の理性と神の啓示の関係性を再考することに対する新たな知的関心にある。そのため、「真実の歴史」を叙述しようとする試みがなされ、そうした状況の中で主だった二つの思想が生まれた。一つは、Marsilio Ficino(1433-1499)による「古代神学(prisca theologia)」であり、ヘルメス・トリスメギストスやモーセ、ゾロアスター、プラトンといったキリスト教以前の古代の聖賢らによって示された真理は、キリスト教神学と一致するものであったが、長い時を経て失われてしまったと考える。もう一方は、Ficino の思想をベースに Agostino Steuco (1497-1548)によって形作られた「永遠の哲学(philosophia perennis)」であり、前者とは対照的に、古代から存在する真理は各時代にも生き続けたとして、その連続性や遍在が強調される。このようにしてイタリアルネサンスでは、キリスト教世界において古代回帰や異教的要素の流入が起こったが、その流れの中核を占めたのは、プラトニズムの再考であり、それを著者は“Platonic Orientalism”と呼ぶ。この動向の要因として著者は東ローマ帝国のプラトン学者 Georgios Gemistos Plethon (1360?-1452)をあげるが、彼が東方よりイタリアにプラトン哲学を持ち込んだことで、Plethon はある意味で東方の賢者であり、“Platonic Orientalism”を体現する人物であるとされる。このようにして、エソテリズムの諸要素の原型がヨーロッパにもたらされたのである。

このようにしてキリスト教以前の諸哲学に惹かれる人々がいる一方で、異教の哲学(pagan philosophy)によるキリスト教の破壊を懸念する人々も当然ながら存在した。彼らは、異教の哲学とは、誤った人間の創造物であり、永遠で歴史を超える真の宗教たるキリスト教よりは劣るもので、プラトン哲学やルネサンスで興隆した占星術、魔術、カバラといったものはキリスト教とは

相いれないもののだとして次々と非難していった。第2章では、宗教改革以後のこうした反異教的な動きについて述べられていく。ドイツの神学者である Jacob Thomasius (1622-1684)は、キリスト教を純化させることを目的として、異教の哲学と神の啓示の差異を明らかにするために、こうした異教的諸要素の歴史的起源を追った。それにより、その起源をゾロアスター教に見出し、二元論的世界観は悪魔により生み出されたものだと批判した。また同じくドイツの神学者である Ehregott Daniel Colberg (1659-1698)は、異教の哲学を排撃するために、異教的とされる諸思想を調査しリスト化した書を著した。牧師であり歴史家でもあった Jacob Brucker(1696-1770)は、古代からの哲学史をまとめた大著を著したが、そこでは三つの分類が示され、一つ目はキリスト教にもとづくもの、二つ目は、理性的な哲学や科学で、妥当性は高いが宗教的ではないもの、そして三つ目は、誤謬に満ちた非合理的なもの、となっており、異教の諸哲学は三つ目に分類されていた。このようにして異教の哲学への攻撃は高まっていたが、皮肉なことに、こうした攻撃対象についての歴史記述や分類作業が、後にエソテリシズムとみなされる領域を形成する一助となっていたと著者は結論付ける。

Brucker の分類のように、18世紀の啓蒙主義の時代に入ると、誤った賈の非理性的な哲学を、理性的な哲学から区別しようとする試みは数多く起こる。それはまた、理性的な宗教(=キリスト教)と迷信的で非理性的な宗教(=異教)を区別するということにもつながった。ここにおいて、プラトニックな異教主義者たち(Platonic Orientalists)は最早排撃の対象たる危険な異教徒ではなく、単なる愚か者だとみなされるようになった。こうして、エソテリックな哲学者たちは哲学史上から姿を消し、古代の叡智という物語は、知的言説のメインストリームにおいて断絶してしまうのである。

啓蒙主義が発展していくにつれて、キリスト教は世界を解釈する権威としての力を徐々に失っていった。それに代わって抬頭してくるのが自然哲学と科学であるが、引き続きエソテリックな諸概念は拒絶され続けていく。そうした中で、「超自然的なもの(the supernatural)」や「魔術(magic)」といった語は本来の意味から変化していき、愚かで非科学的、科学的理性に対する他者、といった意味へと移行する。そして、そうした拒絶された知が集まるごみ箱に対する集積的な語として、オカルト(the occult)という語が現れるのである。第3章ではこのオカルティズムの出現に焦点があてられる。

科学か非科学的なオカルトか、という境界にあった例として顕著なのは錬金術であった。錬金術は早期の化学かオカルト的なペテンか、という問題は、自身を経験主義的な科学者とみなすか、それとも古代の叡智に連なる系譜の者とみなすか、という錬金術師たちの自己認識の衝突を反映していた。しかし結局のところ、学者や知識人たちは、エソテリックな哲学は非理性的であるということによりそれを捨て去り、そして拒絶された知は素人の領域とみなされていった。自然的魔術や占星術、そして錬金術といったオカルト的实践は、伝統的宗教と新しい科学から切り離された文化的領域となったのである。オカルティズムは、エソテリックな思想を持つ人々にとって代替的な歴史的物語を生み出し、「対抗的伝統(counter-tradition)」として存在感を増していった。当初は、秘密結社の薔薇十字団やフリーメーソン内にとどまっていたオカルト実践者が、徐々

に一般市民にも広がっていくようになったのである。このようにしてオカルティズムの勃興をはらんだ 18 世紀という時代は、単純に理性の時代と断ずることは出来ないと言者は述べている。

しかし、18 世紀後半から 19 世紀にかけては科学とオカルトの混合が起こったとして、言者はメスメリズム(動物磁気理論)と、そこにおける「生きている自然(living nature)」という概念を論じている。メスメリズムは当初、正当な医学的パラダイムの内に登場し、超自然的なものではなく、自然で科学的な法則によるものだと考えられていた。結局、動物磁気の内容は証明されず、磁氣的催眠が靈魂との対話のための手段として利用されたことから、オカルト的な様相を強めていくこととなる。だが、動物磁気の内容のもととなった宇宙に遍在する流体という概念は、ドイツ・ロマン主義の宇宙観と相性がよく、ドイツでは多くの支持を得た。そうした中で、メスメリストであった Joseph Ennemoser(1787-1854)は、動物磁気理論の歴史をまとめ、その源泉をルネサンスの自然魔術(magia naturalis)やパラケルススの哲学に見出していた。ここにおいてエソテリックな観念と自然哲学の結びつきが起こり、エソテリズムは、異教の哲学というキリスト教的理解から、自然の神秘的な力に対する歴史的証左という理解へ移行していった。

そして、20 世紀にはアカデミアへのエソテリズムの再来が起こるが、これについて述べられているのが第 4 章となる。20 世紀、特に第二次大戦後には、多くの知識人や研究者がエソテリックな伝統に刺激され、現代世界に対するある種の解毒薬として、新たに非常に影響力のある学究的観点を発達させた。この新たな理論的枠組みは、宗教学において大きな成功を達成することとなる。こうした流れのきっかけとなったのが、1933 年からスイス・アスコナにおいて開催されていたエラノス会議である。ここには、Carl Gustav Jung, Henry Corbin, Gershom Scholem, Mircea Eliade といった多くの有力な学者たちが参集し、議論を重ねた。彼らに共通していた基盤は、歴史的還元主義への拒絶、物質主義的な近代性への不満、神話や象徴を真剣に取り扱うことへの意欲、そして、永遠普遍とは何かということを探し求めて、歴史的な起源を探究するという企てに対して宗教主義的な精神を有していたということである。彼らによって、錬金術やカバラといった、それまではオカルト的なものとみなされていたものが再発掘された。しかし言者は、「真実の歴史」という不可能な夢に根差した彼らのアプローチは、宗教的熱狂(religionism)ともいふべきものであり、エソテリズムに対するアプローチの初期モデルではあっても、歴史的な枠組みとしては決して適切ではないと判じている。

次の転換点となったのは、イギリスの歴史家 Frances Yates(1899-1981)による *Giordano Bruno and the Hermetic tradition*(1964)が発表されたことであつた。ここで、今まで歴史学では扱われてこなかった「ヘルメスの伝統」という存在に光があてられることとなったのである。彼女は、教会や啓蒙主義に対するカウンターカルチャー的な存在として、ヘルメスの伝統の「大物語(grand narrative)」を展開したが、彼女がヘルメティストとしてあげる人々は、ヘルメティズムの影響は見られても、その思想の中心に据えてはいなかったなどといった問題があり、明確な連続する実体概念としてのその存在は批判された。そうして、研究者たちに歴史記述のごみ箱を探究するように仕向けることとなった“hermeticism”という語は、“Western esotericism”という語に道を譲ることとなる。

“esoteric”という語そのものは、秘密、隠されたもの、内的なもの、といった意味では古くは2世紀ごろから使われてきたが、そこから、現在のような歴史記述的な一連の現象群を指す語として“esotericism”という語が造り出されたのは19世紀のことであり、それを20世紀後半のアカデミアに持ち込んだのが、フランスの宗教学者 Antoine Faivre(1934-)であった。彼は当初エラノス的アプローチの熱心な後継者であったが、その後歴史記述的なアプローチに移行し、そうした観点から著された *L'ésotérisme*(1992)は、エソテリシズムをアカデミックな研究の一領域として確立させることとなった。その中で彼は、エソテリシズムの源流は古代にまで遡るが、それが明確な形態をとったのはルネサンス期からであるとして歴史の変遷を述べるとともに、エソテリシズムは4つの内在的な特徴と2つの非内在的な特徴を有する思考様式である、という定義を提出した。前者は、「照応(corespondences)」「生きている自然(living nature)」「想像力、媒介(imagination / mediation)」「変成経験(transmutation)」であり、後者は「和協の実践(practice of concordance)」「伝達(transmission)」である。これは、今までオカルティズムやヘルメティズムといった語で語られていた現象群をまとめて内包できるものであったし、今までになく明瞭な定義の提示であったため、研究としては非常に革新的で、当該分野に多くの研究者を呼び込むことにもなった。だが彼の研究は、キリスト教徒として真のエソテリシズムを求め、反仮現説や反二元論といった観点を有する思想に基づいており決して中立ではない、と著者は批判し、その定義を適用したのでは、スウェーデンボルグの神智学やゲノンの伝統主義、グノーシス主義の一部、カタリ派の二元論などが排除されてしまうとして、疑義を呈している。この定義を援用して、ある思想の要素を分析し、そこにこの定義にあてはまる四つの要素が見出されたら、それはエソテリシズムなのだ、といった手法が Faivre 以後流行したが、こうした手法を著者は「エソテリシズムに対するチェックリストアプローチ」と呼び、その安易な取り組みをも批判している。その後、Nicholas Goodrick-Clarke らのように Faivre の研究を受け継ぐ流れと、それに対して、著者のように新たなエソテリシズム論を検討する流れがこの研究領域で生まれてくることになり、現在に至るのである。

こうしてイタリアルネサンスから20世紀までのエソテリシズムとされている一群の歴史を記述したうえで、著者は自身のエソテリシズム論を結論にて提示する。「西洋エソテリシズム」とは、外的に存在する歴史的現実では無く、知識人や大衆の想像による構築物なのである。著者は、Jan Assmann による「歴史と記憶の歴史(history / mnemohistory)」という議論を拡張し、エソテリシズムの歴史を分析するにあたり、「歴史記述と記憶の歴史記述(history / mnemohistoriography)」という概念を導入する。前者は、実際に過去で何が起こったのかを記述しようとするのだが、後者は、ある既存の文化が想像したものの起源や歴史的発展がどのように起こったのかを記述することである。前章までで概観してきたように、古代の叡智や異教の哲学といった物語はキリスト教の論戦者たちの攻撃対象であり、啓蒙主義者にとっては理性に対置される非理性的な嘲笑の対象であった。このようにして、エソテリシズムというものは「論争的な他者(the polemical Other)」として構築されてきたと著者は考えるのである。だからこそ、著者は、エソテリシズム研究は宗教的になつてはならず、第一に歴史記述的なアジェンダに基づけられねばならないと主張する。より詳細で適切な手法は、記憶の歴史記述であるが、そのべ

ースとなるのは当然ながら歴史記述的な手法であり、歴史記述的な方法論の採用こそが、エソテリシズム研究をアカデミックな研究領域足らしめると著者は述べる。そしてまた、エソテリシズムが「他者」たる所以は、「異教的」であるがゆえだと著者は結論付けているが、歴史記述的な方法によって著者ら西洋の人々の異教的過去を明らかにすることは、彼らの精神的地図の空白を埋め、失った霊的故郷を再統合する一助になるだろうとも著者は最後に付け加えている。

以上が本書の概要である。結論で著者が述べている通り、本書は一貫して歴史記述的な観点からエソテリシズムが概観され、エソテリシズムが異教的な他者として、論戦の物語の中でどのように発展していったのかという点に焦点があてられている。近年のエソテリシズム研究においては Faivre の研究枠組みが主流だっただけに、思考様式としてのエソテリシズムとその研究手法を批判し、独自の視点を提出した本書の新規性・重要性は非常に高いといえる。日本での状況を鑑みると、Faivre の *L'ésotérisme* は邦訳が刊行されており、また『エリアーデ・オカルト事典』にエソテリシズムの項目があり、こちらも邦訳がされているが、その執筆者は同じく Faivre であるということから、我が国において最初に触れることの出来る西洋エソテリシズムは Faivre による研究が主となるといっても過言ではないだろう。そこで Faivre の研究を踏襲することにより陥りがちな安易な分析、著者が言うところのチェックリストアプローチに対する批判は、評者自身も身に覚えがあり非常に耳が痛いところである。こうした先行研究に対する評価・批判という面で、本書は単なる歴史記述にとどまらず、エソテリシズムの研究状況を知ることが出来るというアカデミックな側面からの意義も大きい。

しかし、だからといって本書が提示するエソテリシズム論に、諸手をあげて賛同するという訳にはいかないだろう。著者が提唱する新たな概念である“Platonic Orientalism”という語の妥当性はより慎重に検討されるべきであろうし、本書で記述されている地域が、ルネサンス以後は相当にドイツに偏っているという点にも注意すべきだろう。また、著者は、エソテリシズム研究の方法論として歴史記述的な手法の重要性を説くが、その分野の研究が一つの方法論に限定されてしまうことは、研究の発展可能性を狭めてしまうことにはならないだろうか。これらについては、今後の議論を待つべきであろう。

こうした問題点があるにせよ、エソテリシズム研究における本書の意義を減じることにはならない。エソテリシズムという名の下では、アカデミックな研究分野としては未踏の地であった当該領域は、最初の開拓者による枠組みが支配的となっていた。そこへ本書は一石を投じ、更なる議論を喚起し、研究の発展を促す一助となったことは間違いない。今後のエソテリシズム研究の進展に対して、大きな役割を果たすであろう本書は、当該分野を主研究とする人々だけでなく、西洋の文化・宗教の研究に携わる多くの人々にとっても、何らかの知見を齎してくれる一冊であるといえるだろう。